

対馬における ESD による地域創生



前田 剛 Tsuyoshi Maeda

対馬市しまづくり推進部 市民協働・交通対策課主任

Senior Staff, Civic Collaboration and Countermeasures for Transportation Division, Tsushima City Office, Nagasaki Prefecture, Japan

対馬市しまづくり推進部市民協働・交通対策課主任。立教大学大学院観光学専攻博士課程前期課程修了。大学卒業後、財団法人国立公園協会の調査員としてイリオモテヤマネコ保護事業に関わり、2005年に環境省対馬野生生物保護センターのアクティブ・レンジャー（自然保護官補佐）として対馬へ移住。2009年に対馬市役所に入庁。現在、主に域学連携を担当。

Tsuyoshi Maeda is a Senior Staff at the Civic Collaboration and Countermeasures for Transportation Division of Tsushima City Office. He graduated from the Graduate School of Tourism, Rikkyo University. During the ensuing 4 years he was an Active-Ranger of the Tsushima Wildlife Conservation Center, where he worked for the sustainable coexistence of people and nature including projects for the conservation of the Tsushima leopard cat on Tsushima Island. Subsequently, he has been mainly in charge of the development of human resources through university collaborations and deployment of external personnel at Tsushima City Office.

私の母校で、対馬の活動について講演できることを大変うれしく思います。立教大学で今の私の基礎ができました。このシンポジウムが有意義なものになりますよう、そして私の講演が皆様の活動の参考になりますことを願っております。

最初に、対馬の紹介を致します。対馬は朝鮮半島と日本の九州の間に浮かぶ国境離島です。韓国語でテマドと言います。日本全体が島ですが、さらに小さい島で、面積はシンガポールとほぼ同じです。島の約9割が山に囲まれており、島というよりは、どちらかという山村のようなところ。この島に人口約3万1,000人が暮らしています。集落は125あり、日本海と東シナ海に囲まれているので、日本有数の漁場です。主な産業は漁業、それから林業、農業、観光業です。

対馬はいろいろな宝、地域資源に恵まれますが、その魅力を紹介するタイミングがありません

ので、対馬の特徴のみご説明します。10万年前、朝鮮半島は対馬を介して日本列島とつながっていました。そのときにツシマヤマネコをはじめとする大陸系の動植物が伝わってきました。さらに日本系の動植物が入り、2万年前に対馬という島が成り立ち、島独自の進化を遂げた固有動植物が混在しているというのが対馬の特徴です。米やソバと言った農産物、養蜂、馬などの大陸文化の玄関口、先日、ユネスコの「世界の記憶」に登録されましたが、韓国と日本をつなぐ朝鮮通信使行列の仲介役でもあった島です。

対馬はいろいろな地域資源、自然資源に恵まれています。持続可能な社会を築くためには、この環境がすべての存立基盤です。この資源をどうやって持続可能な形で守っていくか、使っていくか。環境なくして我々人の暮らしは成り立ちません。ただ、環境だけ守ればいいという話では

ありません。やはり人の意識ある行動なくして環境は守れない。しかし、人の意識を変える際には、仕事や収入が必要です。併せて仕事をつくらなければ人は暮らせず、環境や資源を守る行動は生まれません。ふるさとづくり、人づくり、なりわいづくり、この3つのポイントが大事です。

また、対馬という島だけで環境保全や地域づくりが完結するわけではなく、国境の離島ですから、韓国、中国、いろいろな国々と我々の島はつながっている。日本も今は世界各国と切り離して自活することはできない。グローバルな視点を持ちながら、そのつながりを意識しない限り、問題は根本的に解決できない。このつながり、ネットワークをどうつくるか。こういった中で市民参加の自主的な行動が生まれていくことが、持続可能な社会を生み出していくと考えています。その中で一番重要なのが、人づくりです。今日は、主に対馬の人づくりについて紹介致します。

対馬市の重要施策の一番大きな柱が人づくりです。その中で、子どもたちへの教育、若者たちが暮らしやすい環境をどう築くか、そして外部人材の活用、この3つがあります。

まず1点目、子どもたちの教育の中でESDを重要な施策の柱と掲げています。なぜESDを進めているのか、その背景は、急速な子どもの減少、学校の統廃合がありました。将来、対馬に帰ってきたいと思う子どもを育てる。また、グローバルに活動できる子どもを育む必要がある。つまり、対馬に対する郷土愛、ふるさと意識を形成する必要があります。その際に重要な概念がESDであったということです。

対馬市では、地域資源に目を向ければ、生物多様性や野生生物保全、歴史・文化、国境離島ですから海外から膨大な漂着ごみ等、ESDの教育資源になるものがたくさんあふれている。こういったものを活用しながら、小学校ではまず感じ

ること、その次に、知ること、そして、深めることにポイントを置きながら学習を進めています。

中学生になると、対馬の現状や課題と一緒に学びます。問題や関心を広げて、その解決策をみんなで考えて提言していくことを行っています。最近、子ども議会というものを始めて、子どもたちが市長に対してプレゼンテーションを行うといったこともやっています。このように子どもたちの成長段階に合わせて学びを高めていく取り組みを行っています。

さらに高校生になると、中学生までに考えた解決策やアイデアを実際に形にしていく、アクションを起こしていくことをやっています。地域を盛り上げるためにプロモーションビデオを作ったり、いろいろな解決策を考えては、高校生も社会に参加しながら一緒に行動することを行っています。

また、島内には3つの公立高校がありますが、対馬高校では「ESD 対馬学」を展開しています。これは一石五鳥の取組で、ユネスコスクールとしての地球市民教育、ふるさと教育、市民権教育、キャリア教育、そして、一番重要なポイントだと思いますが、予測不可能な社会における能力の育成に取り組んでいます。この学校では対馬のご高齢の方にライフストーリーをインタビューして、その方の人生から環境の変化を感じて、自分たちの未来にどう向き合っていくかという学習を行っています。そのことを新聞記事としてしっかり編集して発表していくこともやっています。

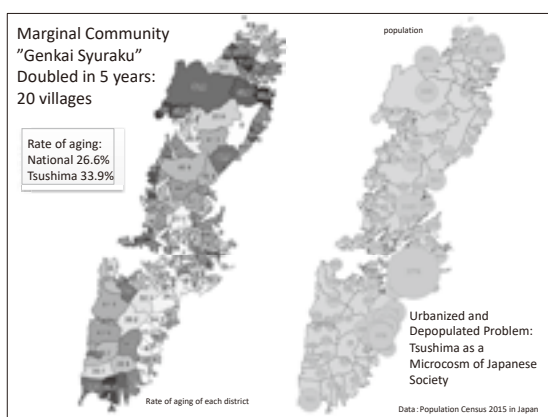
また、国境離島なので、主に韓国との国際交流として、漂着ごみの問題などを話し合っています。また、環境保全の先進地(沖縄県竹富町、山口県宇部市、熊本県水俣市)に行ったり、地域資源を生かした商品開発等にも取り組んでいます。子どもたちの教育についての話は以上です。

続いて、外部人材の活用についてです。地域

の大人、子どもたちだけでは、今の環境保全や地域づくりの問題に立ち向かうことはできません。外からの力がなければ、地域を維持できない。持続可能な社会を形成することはできないといった背景があります。先ほど阿部先生からご紹介があったように、都市化と過疎化が進む中で、自然豊かな地域、田舎で暮らしたい、自分の経験を役立てたいと思う都市の若者は少なからずいるわけです。そういった存在の中から、外部人材を地域おこし、島おこしの新たなリーダーとして対馬に呼ぼうということに取り組んでいます。

日本は海外に比べると急速に都市化と過疎化が進んでいる国だと思います。東京圏に日本人口の約 30%が偏在し、急速に都市化、東京一極集中が進む中で、対馬は高度経済成長期以降、人口が急減しています。かつて 7 万人ほどいましたが、いまは 3 万人ほどで、人口減少率がほかの地域と比べてものすごく高いです。

さらに人口減少の中で島の産業を担う農家の方や漁業者がどんどん減って行って、地域が衰退していく。地域に仕事が無くなれば、子どもたちも減っていきます。この人口減少を 125 の集落別に見ると、現在下図のような状況です。



高齢化率が 50%近い集落もあります。地域のリーダーになる人や、子どもたちが非常に少ない。我々行政は、今後のシミュレーションをしながら予防策、行政としてのさまざまな施策を考えます。

2040 年、この集落はどうなるかという、高齢化率が 100%です。

このように人口が減るといったことを改めて考えると、交通、医療、教育など、行政が提供できるサービスに限界が出てきます。いま対馬では毎年 1 校のペースで学校を統廃合しているという悲しい現実があります。

人口減少は人間社会だけではなく、自然環境にも影響を及ぼします。日本の場合、人の働きかけが加わった里山、里地と呼ばれる自然環境が多数を占めています。人が減ると、その維持ができなくなる。水田は荒れ、山は荒れます。そうなる何が起きるか。イノシシやシカが爆発的に増えて生態系のバランスが崩れます。そうすると農業にも林業にも被害が出る。さらには対馬の生物多様性の危機も訪れます。対馬に存在する特産のツシマウラボシシジミも野生絶滅してしまいました。人口減少は、人間環境だけではなく、こういった生物多様性の問題にもいろいろな影響を及ぼしています。こういった中でどんどん悪い循環が起きます。島の方々は何かしたいと思うけれども、リーダーがいらない、担い手がいらない。また離島ですから、学生や高齢者の方がボランティアとして手伝ってくれる、助けてくれるということもありません。結局何もできずに諦め感が漂って人口が減る。手遅れになって、予防策、対策もなく、コミュニティ、集落の存立すら危機的な状況になる。

我々はいろいろな対策をワークショップや座談会で考えます。いいアイデアやプランは出るのですが、結局前に進まない、つまりくのは、「誰がやるか」という人の問題です。島の人は自分の暮らしや仕事で精神的経済的に余裕がありません。こういった状況では地域づくりをボランティアでやることはできないので、前に進まない。

そこで我々が注目したのが、総務省がつくつ

た「地域おこし協力隊」という制度でした。現在、全国に約 4,000 人の隊員がいますが、隊員たちはコーディネーター、ファシリテーター等、プロフェッショナルとして全国各地で活躍しています。若い外部人材の発想や行動はとてすごい。全国各地でいろいろなアクションや成果を出しています。これは日本が誇れるすばらしい制度だと思っています。

この制度を対馬市も 2013 年に活用して、生物多様性保全やデザイン、教育、文化など、対馬の力を高めるためにいろいろな若者を都市部から招いています。現在 10 名の隊員がいます。すでに 7 名の隊員が卒業したのですが、引き続き対馬の社会的な課題を解決するためのソーシャルビジネスを立ち上げて、島で暮らして頑張ってくれています。とても有難いことです。その中で代表的な人材が、川口幹子さんという生態学者です。彼女は東北大学で研究者をやっていました。東日本大震災が移住の動機となっていますが、彼女は日本の社会は持続不可能な状況であり、エネルギーも経済もこれでいいのだろうかという疑問を持っています。彼女が研究室の中に閉じこもって研究して提案するだけでなく、コミュニティに根差して経済もエネルギーも循環する社会を築かないと日本はだめになる。そういう思いで対馬に飛び込んで来ました。

少ない人口の集落で活動していますが、この集落では「口は出すけれども体は動かない」というご高齢の方ばかりですから、それであればもっと自分の同志を増やそう。若い活力が必要だということで、若手の移住者を呼び込もうと考えました。彼女の志に魅かれていろいろな人材が対馬に移り住んでくれました。国で働いていた職員、環境コンサルタントをやっていたスペシャリスト、さらには共感した大学生が対馬に移り住んで活動をともにしてくれるようになりました。類は友を

呼ぶものです。いろいろなスペシャリストが対馬に入ってきて、今までに無いような活動やアクションを起こしています。川口さんはその集落の漁師さんと結婚し、1 児のママとしても奮闘しています。結婚も出産もその集落では約 20 年ぶりのおめでたいことでした。川口さん 1 人移り住むだけで集落の状況が変わってきました。

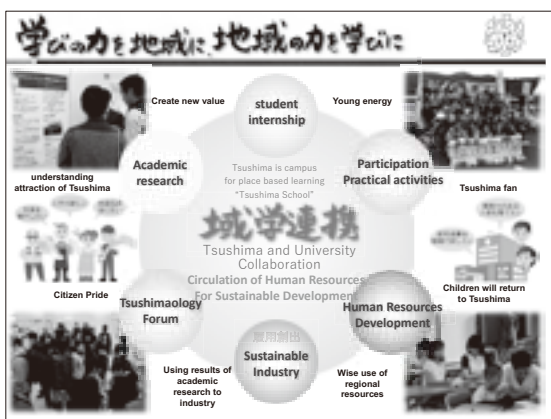
こういった取り組みに都市部の多くの学生、若者がもっと学ぶ必要があるのではないかと。持続可能な社会を本気で築くのであれば、地域に根差した活動に学ぶ必要があるだろうということで、対馬市が彼女たちと一緒に、域学連携をスタートさせました。対馬には大学がありません。20 歳前後の若者は 1%程度しかいません。そういった状況で若者の活力やエネルギー、大学が持っている専門性を活かそうということで、対馬をいろいろな大学のフィールドキャンパスと見立て、「対馬学舎」と称して大学生を受け入れています。大学のリベラルアーツ、専門的な学びがベースとあって、地域の現場に飛び出すきっかけづくりとして短期実践合宿「島おこし実践塾」を毎年開催しています。さらに長期間、自分の専門性を活かして実践活動をしたいという学生に対しては、観光や環境保全、建築など、さまざまなインターシップのメニューを提供しています。

対馬に関して研究を深めたい若者に対しては、対馬市が学生に対して学術研究の補助金を出しています。さらに対馬に移り住みたいという勢いのある学生に対しては、地域おこし協力隊制度を活用して対馬市が雇用しています。この中で我々が日本の若者の力として育みたいのが、現場のリアリティや構想力、企画力、コミュニケーション能力、生きる力です。

域学連携の成果・実績ですが、年間約 500 人の学生、100 名の研究者が対馬に訪れます。北は北海道大学から南は琉球大学まで、文学部

から医学部まで、いろいろな分野の学生、研究者が来てくれます。高等教育機関がない対馬においては、これは大きなインパクトです。島の人々がやりたくてもできなかった、あるいは高齢化によって続けることができなくなったことをできるようになった。やはり若い力、専門性というものはすごい。こういった学生は一度来ると、何度も対馬に来ては卒業論文とか修士論文、ボランティア、あるいは旅行等で再来島してくれます。とてもうれしいことです。中には対馬に移り住んでくる人もいます。こういった地域と大学の連携は、地域づくりにとても貢献しているというのが対馬の実践で分かってきました。

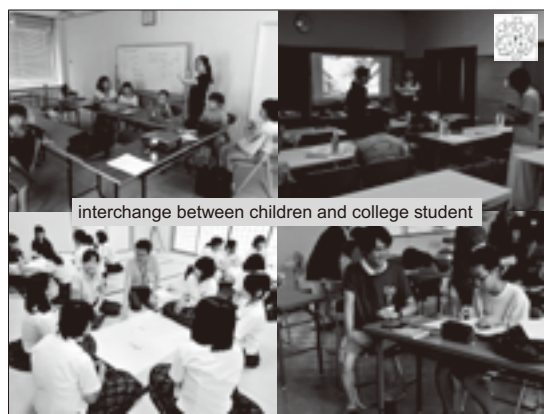
農業とか林業、漁業を通して生物多様性の現状や課題を体感しよう。また、文化、建築、地域住民とか、現代アートを通してさまざまな地域課題を体感しよう。高齢福祉、離島医療など、いろいろな分野にまたがって、実践を通して学生が現状や今後どうすればいいのかといったことを考えていく。そういった場を提供しています(下図)。



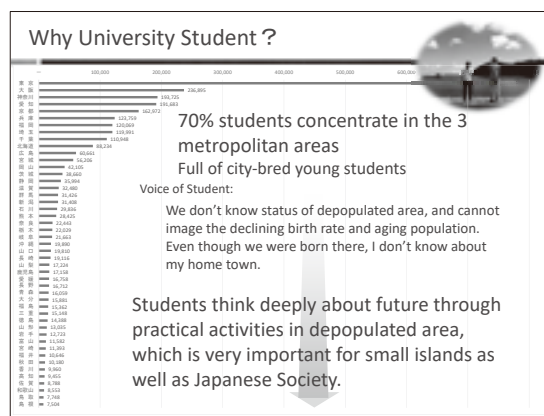
こういった学生が来る中で、我々離島の島民がとても有難いと思うことは、学生が島の子どもたちと触れ合ってくれることです。

島には日本で言う家庭教師や塾といった教育サービスがありません。また、進学のパターンとなりうる大学生が身近にいませんから、子

どもたちに勉強を教えたり、一緒にワークショップをやったり、遊んだりすることで、この先自分がどういうふうに進路を築いていけばいいか、どういった相談や話をしてくれる(下図)。そういったことに付き合ってくれた学生も今日のシンポジウムに来てくれていますが、非常に有難いことです。



こういった学生の活動や成果をしっかりと島の人たちに還元して分かち合うことがとても大事です。そこで、年に1回、12月に対馬学フォーラムというイベントを行い、学生や島の人や研究者がポスター発表をします。そういった中で新たなつながりが生まれて発展していく。そういった場づくりにも取り組んでいます。なぜ我々対馬市がここまで学生の人づくりに力を入れているかということですが、日本の約280万人の学生のうち、7割が三大都市圏に偏在しています(下図)。



しかも今の若者は都会生まれ、都会育ちで、日本の過疎社会、少子高齢化の現状を知らない。このまま社会に出ていっていいのだろうか。そういった考え方から、対馬で学びたいという学生が多数います。これは実は対馬のためだけではなく、日本という国、日本の地方を支えていくためにはとても重要なことだと思っています。島外の大学生だけではなく、対馬で生まれ育った大学生たちも改めてふるさとのことを学び直すことによって、将来対馬に帰ってきたいという声が多く聞かれるようになりました。これもとても素晴らしいことだと思っています。

さらに日本の教育システムの中では、子どもたちの初等教育、中等教育、大学生・専門学校の高等教育、大人たちの生涯学習といったものが重なり合っていない。どれも非常に素晴らしい取り組みをしているのですが、イマイチ高まらない。そこで重要なのが、私はESDや域学連携であると思っています。対馬に大学生や研究者がたくさん来る中で、高等教育に触れていく。ふるさとのことを知り、誇りを持つことで、自分たちの地域支援としての環境や伝統文化をしっかりと守っていこうという思いやアクションが生まれることが、持続可能な社会を実現するうえでとても大事なことだと思っています。

対馬の取り組みを実証的に研究して、さらなる助言を頂こうということで、2016年6月に立教大学ESD研究所とESD研究連携覚書の締結をさせていただきました。阿部先生には何度も対馬に来ていただいて、助言を頂いたり、大学生を連れて来てアクティブラーニングということで対馬の子どもたちと接して頂いたり、学生さんたちは、アクティブラーニングの成果を対馬学フォーラムのポスターセッションで発表してくれたりしています。

我々は、島にいますから、なかなか外部と接

する機会がない中で、同じく立教大学と連携協定を結んでいる羅臼町や西伊豆町といった、他の実践自治体との合同研究会で学んでいく、それを島に持ち帰っていく。国内、そして今回のような海外の事例をつなぐ役割を立教大学ESD研究所が取り組まれている。これはとても素晴らしいことですし、我々としても有難いことです。

ご清聴ありがとうございました。

Regional Revitalization by ESD on Tsushima Isl.

Tsuyoshi Maeda

Senior Staff, Civic Collaboration and Countermeasures for Transportation Division,

Tsushima City Office, Nagasaki Prefecture, Japan

Tsushima Island is located on the border between Korean Peninsula and Kyushu, Japan, in which proximately 31,000 people live in 125 villages. As 90% of the island is the mountain area, Tsushima is like a mountain village. Tsushima has a prominent fishing ground surrounded by the Sea of Japan and the East China Sea. Main industries are farming, forestry, and tourism besides fishery. The plants and animals evolved uniquely are mixed with a traditional culture and a history in Tsushima where variety of local resources and natural resources are found.

To build sustainable society, three policy agenda are important: first, 'Foundation for All', second, 'Human Resource Development', third, 'Creating Employment with Values and Technology'. Above all, 'Human Resource Development' was set as an important policy agenda by the Tsushima City Office. The agenda focuses on 'education for children', 'building social environment for the youth', and 'the employment of the external human resources'.

The Tsushima City Office works on a project to train up the talent which supports a sustainable region by promoting ESD in the education for children. The City Office supports each educational stage with the organized curricula in a school system: primary school, junior-high school, and high school.

Tsushima High School has an integrated study, 'ESD Tsushimaology'. Since the high school

was authorized to a UNESCO Associated School, it works on five educations: UNESCO Associated School Education, Hometown Education, Citizenship Education, Career Education, and Training in Competence for Unpredictable Future. For example, life-story interview with a person of advanced years makes students face reality and future. The high school students perceive an environmental change in the interview. They edit it to issue as a school paper. This is a very efficient learning. Tsushima High School works on the international exchange with Korea, the exchange with the Advanced Regions of Environmental Conservation in Japan, and the new product development taking advantage of various local resources.

To make the most of outside persons, we recruit the youth of the urban areas to be new leaders for regional revitalization in the depopulated Tsushima. Since the rapid economic growth ended, the population of Tsushima dropped from 70,000 to 30,000. Losing job opportunities, the population of the youth decreased. The rate of aging in some villages are 70 %. It's difficult to sustain their daily lives such as transportations, medical services, and education due to depopulation. Especially, educational environment for children is constantly changing because of school consolidation. Depopulation caused devastation of rice fields and mountains. As the population of noxious bore and deer rapidly increased, a balance of ecosystem collapsed. For example, Tsushima uraboshi lycaenidae (*Pithecops*

fulgens tsushmanus) became extinct in the wild.

Then, the Tsushima City Office has recruited the youth from the urban areas to supplement a shortage of manpower for design, education, culture and conservation of biodiversity since 2013 by using a system of ‘Community-Reactivating Co-operator Squad (CRCS) in the Ministry of Internal Affairs and Communications’. Currently, seven squad members of ten ended their three-years term, yet they launched social businesses for continuously living in Tsushima, and for dedicating themselves to the social issues.

As Tsushima doesn’t have universities, the youth around twenty is only 1%. Therefore, Tsushima collaborates with universities in the main lands in order to take vitality of the youth into the island. University students participate in various activities for a short period and experience internships of tourism, environmental conservation, architecture, and healthcare for a long period. Furthermore, we have a scholarship program for the youth who wants to research Tsushima.

If the students are eager to immigrate to Tsushima, the Tsushima City Office hires them by using the system of CRCS. As the students feel a reality in a field of Tsushima, they can cultivate their abilities for plotting, planning, communicating, and living. About 500 students and 100 scholars call on Tsushima per year. Some of them immigrate to Tsushima. From above, the collaboration with universities is appropriate for regional revitalization in terms of a regional development and educating people who have roles for it.

To share the outcomes of students’ activities with the inhabitants of Tsushima, the City Office has ‘Tsushimaology Forum’ in every December. The students, the researchers, and the local people give a presentation each other in the poster session.

70% of 2,800,000 university students in Japan is unevenly distributed through the three major urban areas. Because most students were born and grew in the cities, they don’t know a reality of depopulation and aging population in the rural areas. Therefore, to understand the present condition of Tsushima is important not only for Tsushima but also for students who will have major roles in society. University students from Tsushima also participate in the project, ‘the collaboration with universities’. Since they learnt their hometown with the external students in the activities, they came to hope for coming back to Tsushima in the future. It’s important to realize sustainable society.